

検証 JR革マル浸透と組織私物化の実態！

民主化闘争情報[号外] 2009年8月31日 発行 日本鉄道労働組合連合会(JR連合)【No. 43】

JR東の革マル排除の秘密会議に大塚会長・清野社長も参加！

先のJR東日本大塚社長（当時）の国会答弁では、会社は革マル浸透問題に無関心かのようにみえるが、本音はどうか。JR東日本は東労組偏重の労政を続けてきたが、2002年11月に浦和電車区事件の加害者7名の東労組役員が逮捕されてから、労政にも変化が生まれたようだ。2007年8月には、一審の有罪判決を受け、社員籍のある6名全員を懲戒解雇した。これに対して、東労組松崎元会長は、会社の姿勢に怒りを露わにしている。前出「われらのインター」（Vol.13、2008年9月）に掲載された松崎氏の論文の一部を紹介する。

そして本紙11号および12号などにおいて開示されている文書、「あの連中にはアメ玉を喰わせ、時間をかけ、次第に牙がなくなるように対応し、ついには牙がなくなってしまう—というような遠大な計画がJR東日本の革マル派戦略だ」「松がやめれば、カクもたいしたことない。島田（嶋田）なら取り込める。その時は会社が前に出る。勝負するということだ」—ここに明らかにされているシナリオも嶋田一味を勇気づけるものであったことは当然であろう。会社が勝負に出てきた。あえて仲間たちの生首をぶった切った。ここまでやりながら「会社の労務政策は変更しませんから」などという嘘八百が通じるとでも思っているのであろう。私の知るところでは、公刊されている出版物において明らかにされている、現大塚会長、現清野社長、野宮当時仙台支社総務部長、佐藤正男同勤労課長などの密談・謀議について、会社側からのしかるべき反論も弁明もなされていない。どこをもって「労政は変えませんか」などという甘ったれたことを言い通そうとするのかお伺いしたい。

会社の革マル排除戦略の存在が明らかに！激しく噛みつく松崎氏！

「あの連中には…」の記述は、西岡研介著「マングローブ」の160ページにある。前後を加えて「野宮氏の元部下の証言」を紹介する。

「90年のことです。仙台のメロポリタンホテルに当時、人事部長だった大塚さんと、総務課長だった清野さん、野宮さんら人事・労務関係の幹部が極秘に集まり、今後のJR東労組対策について話し合ったことがありました。その席で大塚さんは『せめて仙台（支社）だけでも、われわれが望む（松崎に支配されない）労使関係を維持してほしい』と話していました。そして（組合から革マル派を排除した）JR東海やJR西日本の労政に触れ、『あのような単純な手法は少なくとも、JR東日本にとっては愚の骨頂だ。あの連中（革マル派）には…（上述）…革マル派戦術だ』と強調していました。清野さんは『社員教育をしっかりとやれば（革マル派による支配は）、必ず防げる』と語っていました。極秘会議に出席していた若手幹部からは『いつこの異常な労使関係から抜け出せるんですか』との悲痛な声も出ていましたが、清野さんは『なんとか軟着陸をめざすしかない。時機を待つことだ』と答えるのが精一杯でした。大塚さんも清野さんも、少なくとも90年時点までは、松崎とベッタリと癒着した住田・松田体制の見直しを図らなければ、と真剣に考えていたのです」

なお、「松がやめれば…」の記述は、「財界展望」の1993年9月号に掲載された、当時、JR東日本幹部の話として出回った怪文書の一部。松崎氏が「マングローブ」の記述や怪文書にさえ激しく反応するのは、それが事実だとわかったからだ。2007年1月に東大社会科学研究所が発行した「佐藤正男 オーラルヒストリー」には、上記と同じ内容が記載されている。JR東日本が革マル排除の戦略を真剣に考えてきたことは間違いなし！